

研究種目：基盤研究 (C)  
 研究期間：2005年度～2008年度  
 課題番号：17520063  
 研究課題名（和文）組織崩壊に瀕する長崎県下カクレキリシタンの緊急調査報告  
 研究課題名（英文）A report of the urgent research on Kakure-Kirishitan in danger of unraveling in the area of Nagasaki prefecture  
 研究代表者  
 宮崎 賢太郎 (Miyazaki KENTARO)  
 長崎純心大学 人文学部 比較文化学科 教授

## 研究成果の概要：

350年余り続いた長崎県下のカクレキリシタン信仰は組織崩壊の危機が叫ばれて久しかったが、ここ5、6年いよいよ解散が進行し、各地区とも秒読み段階に入ってきた。この流れを食い止める方策もなければ、またその積極的な意味も存在しないといえよう。しかし、キリスト教の日本的な受容のあり方を如実に示す貴重な事例として、早急にしっかりその信仰の終焉の記録・資料保存に取り組むことが不可欠である。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成17年度	900,000	0	900,000
平成18年度	600,000		600,000
平成19年度	600,000	180,000	780,000
平成20年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,700,000	360,000	3,060,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：宗教学

キーワード：カクレキリシタン 文化変容  
土着化 キリシタン

## 1. 研究開始当初の背景

長崎県下の現存するカクレキリシタンは世界の宗教史上においても極めて特異な存在として内外の関心を集めているが、その350年の歴史を有するキリスト教の土着宗教が今まさに消え去ろうとしている。その終焉の姿を記録にとどめ、散逸するオラショや諸行事記録、信仰対象、信心用具などを収集し

ておくことは大切な作業である。

しかし、ただ単に記録の保存にとどまらず、後継者なく解散を余儀なくされたカクレキリシタン信徒がその後どのような信仰生活の道を選択してゆくのか大変興味深いところである。

## 2. 研究の目的

長崎県下においてカクレキリシタン信仰がもっとも盛んであった生月島には大きな4つのカクレキリシタン宗団が存在した。その中で山田、元触の3組織はすでに解散し、残る堺目、壺部も役職者の高齢化が進み、後継者難によって組織崩壊の危機にさらされている。

20年以上にわたって調査者は長崎県下のカクレキリシタン宗団を網羅的に調査し、その信仰の本質をほぼ明らかにしえたと考えている。これまで常に組織存亡の危機が訴えられてきたが、近年の急速な組織解散の動きは想像をはるかに超える事態である。

しかるに緊急に長崎県下のカクレキリシタンの終焉の姿を映像的に、また聞き取り調査によってその姿を記録として後世にとどめることは、きわめて重要なことであるといえよう。

カクレキリシタンの消滅は、ザビエルによる日本へのキリシタン伝来以来、450年にわたって連綿として継承されてきたひとつの信仰が完全に幕を下ろすことを意味するのであり、その間の受容と変容のありようは、日本人のキリスト教受容、日本宗教の本質の解明に貴重な資料を提供するものである。

## 3. 研究の方法

### (1) 長崎県下のカクレキリシタン組織現存地およびその状況の再確認

次の①から③のカクレキリシタン残存地区を再訪し、組織の現状について聞き取り調査を行い、可能なものについては極力行事にも参加する。いずれの地区も組織は5, 6年、長くとも10年を超えることはないと思われるので、解散のプロセスに殊に着目しながらその記録収集に努める。

#### ①生月島（壺部・堺目・元触・山田）

#### ②外海地方（出津・黒崎）

#### ③五島地方（福江島・奈留島・若松島）

### (2) 近年解散予定のカクレキリシタン組織の緊急集中調査

本研究の申請書を取りまとめていた平成16年当時、生月島山田地区においての最後まで残っていたカクレキリシタン宗団の解散式がおこなわれる運びと成っており、また平成17年もしくは平成18年3月には、生月島元触のカクレキリシタン宗団が解散の予定であった。これまで強固な組織力を誇っていた生月島のカクレキリシタンも、一種の解散ブームによって、雪崩現象のように解散の連鎖反応が起こっている。その解散にいたるプロセスを克明に記録し、その原因を明らかにしたい。

一方、カクレキリシタン組織崩壊が先行していた外海地方黒崎、五島地方上五島の築地では興味深い新たな動きも出てきている。両地区はカトリック信徒の多い地区の中にあり、普段からカクレキリシタンとカトリックの人的交流は頻繁に行われている。

それに加えここ数年来、長崎県下のカトリック教会群を中心とするキリスト教関連遺跡の世界遺産登録運動が盛り上がり、外海、上五島はまさにその運動に直接結びついている地区であり、カクレキリシタンの歴史にもライトが当てられている。このカクレキリシタンとカトリックの交流の中で新たな信仰の変容が見られるので、組織崩壊末期の現象として着目していきたい。

## 4. 研究成果

長崎県下においてもっとも最後までよくその信仰形態をとどめてきた平戸市生月島のカクレキリシタン組織も終焉を迎えつつある。壺部、堺目、元触、山田の4大カクレ

キリシタン集落のうち山田は完全に解散し、元触の3ツモト組織は正式には解散したが、御堂を作り、ご神体を安置して年に3行事程度小組の組織を残して継続し、未だわずかながら命脈を保っている。しかし、これとて長期間の維持は困難と思われ、遠からず消えゆく解散・消滅の過渡期的な1形態とみられる。

堺目は3グループが一つに統合され、何とか組織の維持を果たしているが、信徒数は少しずつ減少をたどっている。壱部は6グループ存在したが、残るはいまや2グループとなったが、それとても最高の役職者オヤジ様が健在なのは1グループのみで、危機的状況にある。

解散時の大きな問題のひとつは残された信仰対象（ご神体）をいかに扱うかということであるが、生月島の場合「島の館」という町博物館に寄託するか、元触のようにお堂を作って仲間で管理するか、あるいは個人所有のものはひそかに処分されていっているものと思われる。信仰の対象となる物の保存も大切であるが、オラショや行事などの文書記録の保存に留意せねばならない。また可能な限り映像資料も撮影し保存していく方策を練らねばならない。

外海地区の出津・黒崎、上五島地区の築地・深浦・横瀬、下五島宮原のカクレキリシタン組織は従来、生月島よりはるかに先行して深刻な組織崩壊の危機にさらされていたが、黒崎、築地・深浦で共通して新たな興味深い動きが発生している。

すなわち黒崎地区のカクレキリシタン組織の最高指導者（帳方）が死の直前にカトリックの洗礼を受け、その60歳台の子息が帳方を受け継いだ。この亡くなった帳方はカクレキリシタンとカトリックの歴史的なつながりを自認したが、仲間はそれに賛同せず、組織としてカトリックに転宗することはな

かった。

築地の帳方は88歳という高齢で役職を務めていくことができなくなり、昨年末、同組織内にある深浦の前々帳方の50歳代の娘婿に帳役を渡し、自らはカトリックの洗礼を本年5月に受ける予定である。しかし、この受洗はカトリックへの信仰のためではなく、子供が結婚によってカトリックとなり、本人の死後、子供に供養してもらうのにカクレキリシタンでは迷惑をかけるという思いからカトリックの洗礼を受けたのである。

下五島宮原の帳方のケースも同様である。宮原の場合、帳方—水方—取次役という三役がそろわねば行事を遂行できないとされているが、本年取次役が死亡し、88歳の水方も入院し、解散の危機に瀕した。宮原の帳方の子供たちはいずれもカトリックになっており解散後は自分もカトリックにならねばならないかと考えている。

外海、五島地区は長崎県下でも最もカトリック色の強い地域であるが、ここ数年来の長崎県下のキリスト教関連遺跡の世界遺産登録運動にまつわる一種のブーム的な雰囲気がかクレキリシタンからカトリックへの転宗、親カトリック的動きに影響を与えているのは間違いないようである。この新たな動きの意味については慎重に検討せねばならず、カクレキリシタン解散期のひとつの新たな変化の姿として注目していく必要がある。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宮崎 賢太郎  
長崎純心大学・人文学部・教授  
研究者番号：60157625

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者